

## 『離見の見』

西脇市立西脇病院  
病院長 岩井 正 秀

今から約600年前の室町時代に能を大成した世阿弥は、その著書『花鏡』のなかで能の奥義の一つとして『離見の見』という言葉を残しています。これは役者が能を舞っている最中には、舞っている自分を離れた所から冷静に見る別の自分が必要であり、能舞台全体を一望するような視点を持つことが重要だという意味であります。そういう観客からの視線を含めた様々な方向から自分の所作を観察することにより、その結果を自分の舞にフィードバックさせなくてはならないと述べているのです。

この言葉は現代の私たちにも十分通用するものであり、日々の生活や仕事においても重要な示唆に富んでいます。何気なくとってしまう行動や、文言が他の人にはどのように見えて、どのように感じ取られているのか。また、自分は現在、全体の中でいかなる位置にいて、何をなすべきか。そういったことを意識するもう一人の自分というものが必要であるということです。

さらに、これは一個人に留まらず、大小様々な組織にとっても当てはまります。たとえば病院の各部署もそうでありまして、もっと大きく捉えて西脇病院を一つの個性を持った組織として考えたとき『離見の見』という言葉の重要さが見えてきます。病院が患者さんを含めた地域の人たちから、いかに見られているか。診療所や他の病院からどういった評価を受けているのか。また地域医療ビジョンや新しい専門医制度などが進められるなかで、この北播磨圏域において西脇病院はどのような役割、立ち位置をとっていくべきか。これらのことを冷静に判断しつつ、日々の診療に邁進していかねばなりません。

混沌とした先の見えない現在の医療情勢であるからこそ、翻弄されて道を見失わないようにするために、『離見の見』を大切にしたいと思うのであります。